

大地と広い高い空のなかで、マクトナルドの看板が視界に入つて来ると何故かほっとしたものだ。ナイアガラの滝に到着したのは深夜であつた、翌朝、ホテルの部屋のガラス窓から見下ろすナイアガラの滝の壮大さには思わず息を呑んだ。湖面から断崖に垂直に落ちる水の勢いのため、もうもうと水煙が立ち籠める、その滝の横幅も高さも、わが国の浅間山麓の湧き水が作る白糸の滝の数千倍の規模である。

たとえば山紫水明という表現はわが国の自然にこそ相応しいのであつて、荒々しくも壮大なアメリカ大陸に見られる自然の迫力には一体、どんな表現があるだろうか。小さい孫達の関心は専ら、マクトナルドでもらつた景品の腕時計である。おどけた表情のロバの顔が蓋についているちゃんと針が動くしろものである。さて再び西へと移動した車窓の景色は相変わらずであるが、牛が見えたり玉蜀黍畑が広がったりと変化を見せ始めた。雷雨がさつと来て数分後からつと晴れ上がる天候の変

化が幾度かあつて自動車の街デトロイトを過ぎ、やや北西に一時間走つてラシニングに到着したのはナイアガラの滝を出発して五時間後であつた。

さて、人種の坩堝という言葉が実感できる大都市ニューヨークやボストンと比べると、ミシガンの地は先住民族の存在を匂わせるところがある。例えばオケモスという名の町があつて、ちょうど北海道の地名にアイヌ語の名残りがあつたと似ている。何でも大きいアメリカの、新しく移り住むことになつた娘一家の家もまた大きい。二階の窓から外を眺めて「あつ、おうまさんだ」と叫んだ孫娘の視線の先にはお馬さんではなく鹿さんがいて、沼地に足を取られながら走り抜けて行つた。皆大興奮である。一面に芝を敷いた庭には囲いがなく、時々人が入つて来たり、兎や栗鼠、空からは小鳥が舞い下りてくる。

引越し荷物のダンボールの箱がまだ部屋のうちこちに転がつている頃、ご近所の方達がそれぞれ料理を持ち寄つ

て届けて下さつた。紙皿に鶏のクリームパスタやいんげんのナッツあえ、サラダ、ダークチェリーのパイ等がダイニングテーブルの上に所狭しと並んだ。これはこの地方の習慣だそうだ。こちらではそばを用意して食べてもらい、お抹茶を飲んでもらつた。皆さん素敵な笑顔で喜んで下さつた。子供達もたくさん来ていて、どの顔も愛らしい笑顔が輝いていた。

そして夕闇が迫る頃、螢がひかつた。ヒッコリーの大木の腰のあたりでぴかーっ。沼のほとりの草叢のあたりでぴかーっ。すっかり暗くなると、その光りはさらに明るくつきりと光度を増し、数も増えてくる。まるで空の星が束になつて下りて来たようにきらきらと輝いている。

私は和泉式部の歌を口ずさんでみた。  
〈物思へば沢の螢もわが身よりあくがれ出づる魂かとぞみる〉何だかそぐわない感じがした。

## Ⅱ型糖尿病は相続される？



杉本 忠夫  
虎の門病院 内分泌代謝科  
非常勤嘱託医

この数年、メタボが国民の間で大きな関心を呼んでおります。ところで、メタボの先には糖尿病が見えています。糖尿病は国民の間では生活習慣病としてメタボと同様に関心が高まっています。また、糖尿病の罹病率が上昇し、糖尿病予備軍（境界型糖尿病）も急速に増加しているといわれております。厚生省はじめ日本糖尿病学会、日本糖尿病協会などが連携し、その発症予防に一丸となつて取り組んでいます。そのため向こう五年間は糖尿病予防に関連した啓蒙運動が活発に行われること

なっています。

ところで、糖尿病には大きくわけて次の二つのタイプがあります。Ⅰ型糖尿病またはインスリン依存型糖尿病とⅡ型糖尿病またはインスリン非依存型糖尿病の二つの型です。

Ⅰ型糖尿病は三十年前は小児糖尿病と呼ばれたこともあります。このⅠ型糖尿病は生命維持のために毎日インスリン注射が欠かせない糖尿病です。インスリンとは胃の後ろにある膵臓で産生・分泌されているホルモンです。

Ⅰ型糖尿病は膵臓からインスリンが

全く分泌されないタイプです。万が一、Ⅰ型糖尿病の人がインスリン注射を中止すると、何も食べなくても血糖値が一時間に四〇づつ上昇していきます。したがって、丸一日（二十四時間）インスリン注射をしないと、血糖値が四〇の二十四倍の約一〇〇〇ととんでもない高さまで上がります。この血糖値ではインスリン注射を再開しないと糖尿病性昏睡に陥り生命が危うくなります。

ところで、インスリンが発見される一九二一年以前は子供さんが糖尿病を発症すると大多数は三から七日以内の命だったそうです。したがって、インスリンが発見されていなかった当時は致命的な病気でした。

幸いにも、一九二二年に膵臓からインスリンが発見され、直ぐに臨床応用されてからはそのような悲劇はなくなつたようです。

このように糖尿病でもⅠ型糖尿病とⅡ型糖尿病では発症の仕方、治療法が異なります。糖尿病がどちらのタイプ

か注意が必要です。

I型糖尿病は糖尿病全体の約5%を占めています。その一番の病因は風邪のようなウイルス感染症です。風邪は咽頭痛・高熱などの症状を呈し数日で自然に治まります。ところが、極めて稀にその約20日後にI型糖尿病が発症することがあります。その症状は急激な口渇、多飲、多尿、体重減少、倦怠感です。

風邪の後にこのような症状が認められた場合は、近くの医療施設で尿糖、血糖を測定して頂きましょう。その検査結果で診断がつけば近くの糖尿病専門医を受診し、直ちにインスリン皮下注射療法を始めましょう。

もう一つのタイプのII型糖尿病の病因は遺伝が大きく関与しています。検査などで血糖値が高いと指摘を受けた場合、身の回りの親族に糖尿病の方がいないか確かめることが大切です。

II型糖尿病はほとんどインスリン皮下注射療法は必要ありません。食事療法と運動療法を行えば血糖値は著明に

改善します。ところが、豊かな食生活、便利な交通機関の利用で食事療法も運動療法も永く続けることが難しいようです。

そこで、糖尿病まで相続したかもしれない裕福な家庭での「変わった相続」のお話を酒林の酒肴にしてみましたと思えます。

ある立派な会社の社長のケースをお話ししましょう。その方は毎日忙しく任務をこなし、海外にも仕事でしばしば出かけ、とても活発な社長でした。

六〇歳過ぎに、突然体調不良を訴えられ、体温を測ったところ三九度以上の高熱が出ていました。そのため、緊急入院となりました。高熱の原因は急性腎盂腎炎と診断され抗生物質と輸液を点滴し治癒しました。

ところが、血糖値が三六〇で、母上が糖尿病だったこともありII型糖尿病と診断されました。入院中、糖尿病の治療は急性腎盂腎炎の高熱のため、一時インスリン皮下注射療法を行ないました。しかし、退院時は熱も下がり、

食事療法のみで血糖は良好となりました。退院後は毎日三〜四kmの歩行運動、食事療法を守って血糖は最善に保たれておりました。

この社長が高齢で心臓発作のため急逝され、社長の婿養子が相続し社長に就任されました。新社長は精力的に仕事をこなし、海外にもよく出かけられました。この若社長の身内には糖尿病の方は誰もいませんでした。しかし、体重が増加し、数年後に毎年受けていた人間ドックで糖尿病と診断されました。

このように身内に遺伝が認められない場合でも、接待のご馳走による栄養過多、また車移動による運動不足と不健康な生活習慣が糖尿病を相続した大きな要因と考えられます。

そこで、食生活を守り、適度な運動を行なうことで糖尿病はじめ生活習慣病を相続しないように心がけましょう。(血糖値の単位はmg/dl。文中省略しています)

# ルドベキア

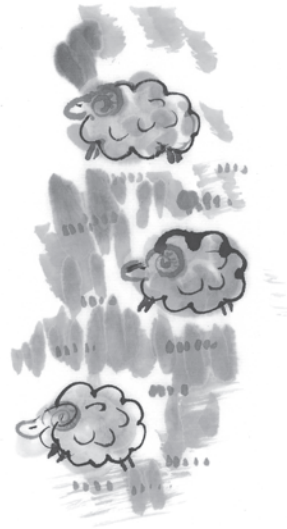
中西美子



なぜかアメリカの田舎を思い浮かべてしまうこの花はルドベキアといえます。最近、たまに店先で見ることがある黄色い花です。行ったこともない場所や情景を想像させてくれるものはいくらでもあります。植物は、特別いろいろな情報を与えてくれます。

わたしは、全然華やかではないけれど可憐な黄色い花に漫画のポパイに出てくるオリーブを重ねてしまいます。背が高く風にそよぐ姿は、日本風景には似合わないだろうと勝手に思っています。案の定原産地は、北アメリカです。日本の桔梗やナデシコなどの草花には、どこか情緒を感じます。ルドベキアは、なんとなくチープな感じがします。でもそこがいいんです。見つけたら必ず買ってしまいます。

# 夢と『夢日記』



志し  
村むら  
有くに  
弘ひろ

(文芸評論家・  
相模女子大学名誉教授)

私も人並みときおり夢を見る。と言っても、ほとんど記憶に残らない。私の見る夢の大半は色がついていない。色とは赤、青、緑など色彩のことである。以前、山下武を中心とする小さな勉強会で、自分の夢を記録している人が、夢日記の研究発表をしたことがあった。その人は島尾敏雄の『夢日記』をはじめとして、洋の東西を問わず、夢関係の書物を収集し、自分自身が見た夢を克明に記録していた。夢を見て目

が覚めるとただちに日記を書くのだという。研究会でノートに書いた日記を回覧してくれたのだが、それは鮮やかに色がついていた。私はその人に、「あなたの夢には色がついているのですか」

と訊いてみた。その人は、「ついています」と応える。

以前(と言っても大昔のことであるが)、心理学の授業で、

「夢は色がついていないのがノーマル。ついているのはアブノーマルだ」と教わった。それで、私は「自分は正常なのだ」と安心していた。ところが、自分のまわりの人で、夢に色がついている人が多いことに気がついた。物書きであるならば大半の人は、日記を書いていることであろう。だが、私はまめに日記を書く方ではない。しかも、私の場合、日記といっても日記帳に書くのではない。冊子仕立ての原

稿用紙に書くのである。作家の榊山潤は小さな手帳にその日の出来事を書いていく。私はよほどの事件がない限り、日記を書くことはしない。書こうと思うときは、多くの場合、悲しいできごとがあったときか、腹だたいいことがあったときである。だから、私の場合、自分のことは棚に上げて、腹の立つことをされた相手を文字の上で罵倒し、徹底的に憎んだりする。文字の上で怒り狂うと、それだけで案外、腹立ち現象はおさまるものである。ともあれ、読み返したこともないけれど、たぶん私の日記は『罵詈雑言帖』とも称すべき様相を呈しているに相違ない。漫画家のつげ義春は、島尾敏雄に勧められて夢の記録を始め、『夢日記』を上梓した。

きる作家に、奇妙な畏敬の念を抱いたことは確かである。島尾敏雄とて、夢の記録であるから、文章にもどかしさ、ただどしきがある。しかし、それがまた不思議な面白い世界を作り上げている。島尾はその後も『夢日記』（河出書房新社、昭和五十三年）を刊行した。島尾は日々の日記とは別に夢日記も書き続けたのだから、日記を書くことに相当の時間を費やしたと思う。

島尾が他界したあと、ミホ夫人から「色彩を失いました」という便りを貰ったことがあった。これは夢の世界ではなく、現実の世界で、悲しみのあまり、ミホの眼にはモノクロの世界しか映じなくなつたわけである。

島尾は若き日、中谷孝雄や佐藤春夫の作品を愛読していた。中谷は九十歳まで生きたが、ある日、「私の夢の中に出てくる人は亡くなつた人ばかりです」と語つたことがあった。私は今、中谷の夢に色がついているかどうか聞き忘れたことを残念に思っている。

今の若者の大半は夢に色がついてい

るらしい。信じてよいのかどうか分らないが、カラーテレビの影響で今は夢に色が付くのは普通だといわれる。信じてよいのかどうか分からないというのは、カラーテレビや天然色映画が存在しない時代に、ある人の夢に色がついていたとしたら、それはどう説明するのか、という疑問が残る。いずれにしても、色がついている方が綺麗だし、ほんやりとしたモノクロの世界よりも印象が鮮明だから、その方がよいのかも知れない。

昔は、夢は信ずるに足る現実体験の一つであつた。平安時代の物語文学『浜松中納言物語』では夢のお告げが重要な素材となつている。中世女性の日記『とはずがたり』には七十個の夢の文字が使用されている。『宇治拾遺物語』には「ひきのまきひと」（吉備真備かという）が他人の見た吉夢を夢解き人を媒介として買い、出世した話がある、島尾敏雄に限らず、夢と文学との関係は看過できないものがある。

# 目覚まし時計

佐川 毅彦

アトリエに古いゼンマイ式の時計がある。それが鳴ると部屋の中にカミナリが落ちたようにけたたましくわめき散らす。

これは私の時計ではない。  
以前、同郷の男と共同で部屋を借



りた事があった。一室を私の仕事場として使わせてもらっていた。  
その当時私はかなり酒に狂っていた。

朝昼晩関係なくよく飲んでいたものだ。部屋の中の小銭をかき集めた

り金がない時は古本屋に本を売り、帰りは酒を買ってもどっていた。飲酒のあい間にかろうじて仕事をこなしていた。ある時は男の秘蔵のウイスキーをコップ半分くらいもらい、もらった分だけお茶をたした。数日もしないうちにボトルの中はお茶だけになってしまった。私は家賃など払った事がなかった。いろんな事情があり男は故郷へ帰る事になった。私の払うべき家賃と水道光熱費で三十万借りということになった。目覚し時計はその時男が残していた物である。

その後生活にすこしゆとりができ彼の実家に借金を送った。散歩していると久しぶりに男と会った。なつかしかったので実家の二階のアトリエに一杯誘う事にした。結婚をして近くのアパートに住んでいるという。これ君のだろうと例の時計を返そうとしたがどうでもいいような態度でそんな物いらんという。最後まで盛り上がりまままま男は帰っていった。結局時計は今でもアトリエにいますわっている。



# 「物と形と動き」



志し村むら栄よし守もり

(評論家)

最近の世相で耳目を集めた表現と言え、**「最低でも何々：」**というものだろうか。

とともに、その結果を見て、一部の人はこんなことをあらためて確認したかも知れないと思った。「心を善意で満たして企図したことも、まったくその思いとは逆の光景をこの世に現出してしまうことがあるものだ」と。

こんな時、世の中をカバーする規範、**規矩きく**とは別に、いわゆる良識的判断とは異種の発想が存在するのではないかと、という疑念が少なからず蠢き始めるのではなからうか。

話は唐突に転じるようだが、あのデカルトと言えば『方法叙説』と反応した学校時代できつぱりと訣別し、その

人となりを尋ねる人はごく稀れなのではないかと想像される。もちろんその大勢のうちの一人なのだが、小林秀雄の著作に傾斜した長い年月を経て、あの日のこと、その人物像、少なくともその一面が眼の前をよぎった。

ヴァレリイと小林を「フィルター」にして目撃した幻覚かも知れないのだが。

世にあまり知られることがないようだが、小林の中期に『ヴァレリイ』という重要な作品がある。

「世人の信ずる生活とか生命とかいふ何か意味ありげなものは、悉くデカルトの精神によって疑われ、意味ありげな意味を剥がれて、物と形と動きのなかに投げ返された。」

私達は普通には、『方法叙説』という固いタイトルに怖れをなし、その内容にまで入って行くことを躊躇する。ところが、小林にこのように書かれて、そのような怠惰な神経にも何かがピピッと走る。

言ってみれば、小林が長年、満身の力でこれでもかと思はかりに書き尽くしたドストエフスキイに關しての論述に感服してきたことが、天啓を誘発するかのようによび、両著に通底する何かにハッと気づかされた、ということらしい。

しかもそれは、徐々に鮮明化して、まさかという思いを通り越して、ええーっ！とばかりに、天を仰いでしまつたわけだ。



当たり前には「生命」と言えば即、尊厳という言葉が衍のように反響するのはいいとしても、それ以外の何かをまことに見掛けることのないただいまの世相のようではある。

同著で小林は、デカルトの「ほんたうの生活の極意」という視点からの言葉であるとの文言を添えてはいるが、一步、曲解すれば大変なことになるパラドックスであること、これは間違いないようだ。

しかし、そんな危険きわまる言葉とは言え、これが揺るぎないものであることは、ヴァレリイから以下を引用していることから分かる。「ここに一見逆説と見えて、実は極めて率直な言葉がある（いろいろな規則や記号や通信から何事も学ばないといふ事、さういふ事は要するに、眼に見えるものを、まさに眼に見えるもの、つまり形と運動とに還元する事ではなからうか——これほどデカルト風な事があらうか、どうであらう。）」

そして、このことわりも書いている。「形と運動とは、勿論、理解の抽象的型式の意味ではない」。

さて、「形と動き(運動)」に執拗にこだわって繰り返したが、実は、たった一つの言葉の周囲を放浪していたわけだ。それは、私達、人間の観念というやっかい者だ。

私達は観念を欠いて、人間をやって行くわけにはいかないが、同時に、観念との「つきあい」次第では、地獄に突き落とされもする曲者であろう。しかも、この事実はまだことに人口に膾炙することがない、という不思議な現象が見られもする。

と言うことから、小林『作家の顔』から、奇怪な文言を引く。

「あらゆる思想は実生活から生れる。併し生れて育った思想が遂に実生活に訣別するに至らなければ、凡そ思想といふものに何の力があるか」。

これに関しては本人すら、その後の『思想と実生活』で、「奇矯な言を弄した」と弁明したうえ、その先でこう書いている。

「思想を実生活から絶縁させようといふ様な狂気の沙汰を誰が演じるか」。

この辺りの小林は、失礼ながら錯乱したかのようになっていたらうだが、だか

らこそ、そうだ、だからこそ、何かが見えて来る気がする。「思想が」「実生活に訣別する」という、異様な表現を小林はなぜ、採ったのか？それは、自らの観念に苦悩した人だけが真相を知ることの世の秘密の一つではなからうか。

ここは、鋭利過ぎた自らの観念に苦汁を味わった若い小林の姿が、まさに彷彿とすることでないか。だからこれは、観念との訣別の宣言だつとは読めないか。つまり、「物と形と動き」を得て、ごくごく若い時、自身がこうして蘇生した、と。

「発見は何物でもない。困難は、発見した処を血肉化するにある」恐らく彼の沈黙の最大の理由は其処にあったのであらう。

正鵠を得たどんな信条も、観念というところにとどまったならば、「思想といふものに何の力があるか」との自戒が、この文言の背後には当然、息をひそめていよう。「血肉化」とは言い得て妙そのものだが、ヴァレリイと小林の肺腑の言ならばこそ、とは言えないか。

# 真夏のボタン雪



桐原良光

(文芸ジャーナリスト)

二〇一〇年七月、真夏のボタン雪に遭遇した。

マッターホルンが眼の前に見えるはずのゴルナーグラート駅まで登山電車で登り、標高三、一三〇メートルの展望台に立った時、雲まじりの空から、ついには強風に煽られたボタン雪が吹き付け始めた。それなりの支度はして行ったが、寒かった。四、四七八メートルのマッターホルンをはじめ周囲の山はまるで見えなかった。真夏の山で遭難するということはこういうことなのかと一瞬考えた。

「アルプス三大名峰と氷河特急の旅」というパッケージツアーに乗った。出

発の一週間ほど前に氷河特急が脱線事故を起こして、兵庫県のご婦人が亡くなったばかりだった。複雑な思いであったが、「三大名峰」をこの眼で見たいという思いが強かった。ぼくたちが乗った氷河特急は、事故車とは反対方向から、現場をゆっくりと、超ゆっくりと通過した。レールや工事機材が置かれ、復旧工事に当たる作業員たちが列車のすぐ下に見える地点では、日本人乗客は黙祷する思いであった。

「三大名峰」を完璧に見ることができた。これは感激であった。たった八日間（現地六泊）のツアーで全部見ることができたのは、ツキがあったという

しかない。マッターホルンも、ツェルマットに到着したその日からあのワシのくちばしのようにちよつと曲がつた山頂をのぞかせてくれた。翌日の早朝も、ぼくの撮影が終わったあとから雲がどどん厚くなり始めて、ついには前述の展望台のボタン雪になってしまったのだ。

フランスとの国境に聳え立つモンブラン（現地の案内図では四、八一〇メートル。マッターホルン同様、広辞苑表記とは少々異なる）へは、フランスへ入ったシャモニーからロープウェイでエギーユ・デュ・ミデイ展望台まで一気に登りつめる。巨大な岩壁に這いつくばるように、時には垂直に登っているのではと錯覚させるほどの急角度で登っていくロープウェイは、標高差二、七四七メートルというからハンパではない。恐ろしいほどのルートだ。ここには年間五十万人が訪れる。この日も各国からのおびただしいツアー客が詰めかけていて、ぼくたちの待ち時間も一時間半以上であった。山頂からさら

にエレベーターが設置されており、登り詰めた展望台は三、八四二メートル。ご存じ三、七七六メートルの富士山を凌ぐ。

ここで眼前にする西ヨーロッパの最高峰モンブランの連山の迫力は、もの凄いいというしかない。言葉の乏しさを嘆くしかない。展望台からは遙か下の雪の尾根を一步步と登ってくる、ザイルで結ばれた完全装備の登山者のグループが小さく見える。この展望台の階段を登る時は、さすがに少々息がキツい。四半世紀以上前に富士山山頂を目指した時は、八合目を過ぎた辺りからアヘアヘ状態だったから、当然のことであろう。

ところでモンブランの主峰は丸い雪山で、主峰だけを写真に撮っても迫力がない。現地で見えた写真や絵、土産物のデザインでも、主峰だけのものはない。主峰を実際に見て、ケーキのモンブランの、あのやさしい丸い屋根がようやく理解できた。

ユングフラウは標高四、一一五メー

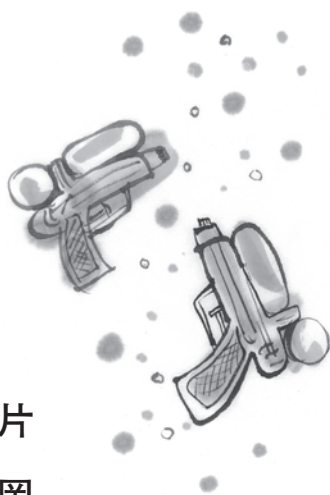
トルの巨大な山容を誇る。その巨大な山が、メンヒ（四、一〇七メートル）、アイガー（三、九七〇メートル）をはじめとした四、〇〇〇メートル級の山々を従えるように聳え立っている様は、まさに壮観だ。

このアイガーとメンヒの岩盤を貫くトンネルでユングフラウの懐近くまで鉄道で行けるのがユングフラウ観光の大きな魅力だ。グリーンデルワルトからクライネシャイデックを経て、アプト式の登山電車は一気にユングフラウヨツホ駅まで登り詰める。車窓の両側に次々と展開し、様々な表情を見せる山々に息を呑む思いでシャッターを切り続けていた。山頂の駅は、三、四五四メートル。ヨーロッパ一の標高を誇る駅で、「トップ・オブ・ヨーロッパ」の表記がある。山頂駅からは外に出て雪山を歩いて展望所へ行くこともできる。快晴無風。スイス国旗が垂れ下がったままだった。「凄い、凄い……」と眩きながら山容と氷河原を眼に焼き付け、シャッターを切った。

帰りは途中駅のアイガークレッツチャーからクライネシャイデックまで、一時間半ほどの下りのハイキングを楽しんだ。咲き乱れる高山植物の花々と、次々と表情を変えてくれる山容が青空に映えて美しかった。

クライネシャイデックには「強力伝」で直木賞を受賞し、「八甲田山死の彷徨」や「劔岳 点の記」などの山岳小説でも知られる作家、新田次郎の記念碑があるので、どうしても行きたかった。ちょうど三十年前に六十七歳で亡くなった新田さんには、生前、親しくお付き合いいただいた。記念品が納められている碑は、辺りの自然に溶け込んでなかなか見つけられないほど控えめだった。小さな銅版プレートに「アルプスを愛した日本の作家新田次郎ここに眠る」と記してあった。墓の正面は、アイガーとメンヒの堂々たる山容だ。長年の気懸かりをようやく果たした思いで、ぼくは記念碑と山々に頭を垂れた。

# 水鉄砲をふたつもらった



## 片岡義男

(作家)

午前中最後の電話は彼女からだった。

「会いましょうよ。久しぶりに」  
と、彼女は言った。

桜が終わる季節に会って以来、猛暑の真夏のまんなかであるいままで、彼女とは会っていなかった。

「大変な暑さだよ」

「私は平気です」

「僕も暑さなら歓迎だ」

会うとは言っても、なにをするわけでもないし、しなければならぬことは、なにひとつなかった。ごく気楽に、ただ会うのだ。イラストレーターである彼女と、作家である僕とのあいだには、仕事の話がひとつだけ存在していた。僕の文章に彼女のイラストレーションで、なにか一冊本を作りましょう、という話だ。どんな本にすればいいか

アイディアはさまざまに出るのだが、まだまとまっていなかった。間に入っている編集者は、おふたりの年齢差がなんらかの推進力になるような気もしますが、などと言っていた。彼女は僕のちょうど半分くらい年齢ではないか。

彼女が住んでいる場所の近くに公園がある。良く出来た居心地のいい場所なのだが、いつも人の姿はない。駅から歩いて来てまっすぐにその公園に入った突き当たりのベンチにいます、と彼女は言った。その日の午後、おそらくもつとも暑い時間が、待ち合わせの時間となった。

約束の時間どおりに僕はその駅までいき、駅を出て三十五・六度という気温のなかを、公園まで歩いた。公園に入るとすぐに、向こうの木陰になったベンチに彼女がひとりでいるのを、僕の視線はとらえた。ヒールのある夏のサンダルにショート・パンツ、そして白い半袖のシャツの彼女が、僕の姿を目にとめ、片手を上げて振った。

僕は彼女に向けて歩いていき、その僕に向けて彼女も歩いて来た。彼女は両手になにか小さな物を持っていた。ふたりの間の距離がつかると、彼女が両手に持っているのは、ピストルのかたちをしたプラスチック製の水鉄砲だとわかった。さきほどまで彼女がすわっていたベンチには、エヴィアンのプラスチック・ボトルがあった。なるほど、僕は思った。自販機で買ったよく冷えたエヴィアンを、両手に持っている二丁の水鉄砲に、彼女は満たしたのだ。

ショート・パンツとその美しい脚も凛々しく歩いて来る彼女から十メートルほどのところで、僕は立ちどまった。そして左手を斜め外に向けて頭の高さまで差し出し、

「射つていいよ」

と、彼女に言った。足をとめた彼女は右腕をまっすぐに上げ、水鉄砲で僕の左の掌を狙い、引き金を絞った。猛暑の日の強い陽ざしのなかを、射出された細い水の線が、思ったよりも強く、

飛んでいった。そして五本の指を開いている僕の左の掌に、命中した。飛沫が周囲へ飛んでいった。「こっちも」と、僕は右手をおなじように差し出した。

左手の水鉄砲を彼女は射った。僕は左手を下げ、水鉄砲からの水はなにも命中しないまま僕のかたわらを飛んでいった。

「はい、ここ」

下げていた左手を僕は頭の上にかかげた。同時に右腕を真横にのばし、開いた掌を彼女に向けた。左右の水鉄砲を彼女は同時に射った。僕の左右の掌に、水はそれぞれに命中した。掌を外に向けた両手で僕は顔を覆った。彼女がそれを狙って両手の水鉄砲を射つのを、僕は広げた右手の指の間から見た。

「もう水がないわ」

笑いながら彼女が言った。僕は彼女に歩み寄り、ふたりにベンチに戻った。そしてベンチにすわり、

「これをふたつとも、あなたに上げます」

と言つて二丁の水鉄砲を僕に手渡した。ひとつは本体が透明なプラスチックで、もうひとつは透明なピンクだった。銃身の上には、どちらにも黄色い水タンクが前後にならんでいた。前のタンクは円筒形、そしてうしろのタンクは球形だった。

「さっき、駅のなかの雑貨店で買ったの。ひとつが百五円。あなたを待つあいだ、ここにすわってエヴィアンを入れて、射つてみたの。水はたくさん入るし、かなり遠くまで、きれいに飛ぶのよ」

ピンクの水鉄砲を僕の手から取った彼女は、球体のタンクをはずし、その穴からエヴィアンの残りを水鉄砲のなかに入れた。そしてタンクをつけ直し、僕たちの頭上に向けて右腕をのばし、引き金を絞って絞った。空中へと射出された水は、にわか雨のように僕たちに降りかかった。水のなくなった水鉄砲を彼女は僕に返し、

「あげます」

と、もう一度言った。

# 絵葉書に励まされて



## 新田啓造

(ジャーナリスト)

昨年の春以来、闘病生活が続いている。直腸癌を全摘し、すでに転移していた肝臓癌と抗癌剤で対抗しているところだ。癌宣告を受けてから、別段、隠すこともなからうと、聞かれれば癌だと答えてきた。当初は発見も遅れて体力も急激に衰え、残り数カ月くらいに考えていた。ところが、この抗癌剤が効いたのか大分、体調も回復してきたような気がする。

それまで見舞いにくしてくれた皆さんに礼状を書いたり、お見舞いに頂いた

本を読んだりすることができるようになった。小沢昭一著「俳句武者修行」高島勝彦著「甘い生活」、東京を描く市民の会著「東京 よいとこだけ、スケッチ散歩」等々、気軽に読める本ではあるが、体調の悪いときには読む気力も湧いてこなかった。

見舞いの手紙もよく頂いた。その中で、とりわけうれしかったのは絵葉書であった。高校時代からの友人であるK氏から、約半年の間に十五通の絵葉書を読んだ。見舞いの言葉と共に近況

が添えられていた。

最初の絵葉書は「美ヶ原高原」早春の訪れ。二通目はネパールの画家テンジン・ヌルプの絵画、三枚目から五枚目は自分で撮った写真を絵葉書風にプリント、六枚目、七枚目がボルゲーゼ美術館、ポッティチェリの「聖母子・洗礼者ヨハネと天使」、ラファエロ「一角獣を抱く貴婦人」、そして八枚目から自作の絵葉書。

五月八日(土)に、中央線の上野原からはいる「坪山」なる山へ知人たちと登って来ました。ヒカゲツツジが売りものとのことですが、この花は終わっていました。一〇〇〇メートル程の山ですが思いがけないことに「イワカガミ」の群落に出合いました。快晴で若葉も楽しみましたが急坂が多く、ヒーヒー言って登りました。今月、N氏らと、また白馬に行く予定です。

という文章が添えられたもので、イワカガミの写真が見事でした。近所の満開の桜、庭のボタン、山菜採りに入った白馬のゲレンデ、と自作写真の絵葉



書の力作が続きました。

「平家物語」の旅先からの厳島神社の夜景もありました。K氏の他にも絵葉書を頂きました。姪や甥から、加山又造展より「春秋波濤」、ピーテル・ブリューゲル「大きな魚は小さな魚を食う」等でした。

絵葉書は、ひと目で美しい絵や写真が眼に飛び込んでくる。旅先から出す観光絵葉書がもつともポピュラーだがそこへ行ってきたことがなんとなくわかるところがいい。美術館絵葉書も同じ。出した人の近況が想像できる。

まず絵や写真を見てから文を読む。絵葉書には難しいことは書かない。全文字でせいぜい一五〇字前後、小さな文字で書いても二〇〇字がいいところ。

この字数がよい。読む方も、書く方も気軽にいける。特に病人にとつてはうれしい限りだ。疲れずにすむということとは、何より有難いことなのだ。

百科事典によると、絵葉書のはじまりは、一八七〇年、普仏（プロイセン・フランス）戦争のときドイツで官製は

がきに兵士と大砲を印刷したものが最初とされている。

ちなみにこの闘い、ビスマルク率いるプロイセン側が圧倒的に優勢で、ナポレオン三世はセダンの戦に敗れ、同地で降伏、退位した。

パリでは共和制の国防政府が樹立され抗戦が続けたが、一八七一年一月開城。フランクフルト講和条約により、フランスはアルザス・ロレーヌを割譲し、賠償金五十億フランを支払った。

この間、ドイツ諸国はプロイセン側について参戦、一八七一年、ドイツ帝国が成立した。故郷の地を離れた兵士が戦場から出したのが絵葉書のはじまりだったのだ。

十九世紀末には英国およびヨーロッパ諸国で絵葉書の収集が大流行した。日本でも一九〇〇年には私製はがきの発行が認められ、一九〇二年には官製の絵葉書も発行されて人気を呼んだ。

現在では、観光みやげ用の私製の写真絵葉書が多いが、すでに印刷されているものではなく、官製及び私製はが

きに自分で自由に絵を描き、あいさつ程度の一文を添える（絵手紙）が静かなブームとなっている。

以上は百科事典からの引用だが、いまはデジタルカメラとパソコンを使って、見事なまでの写真絵葉書が割と簡単にできるようだ。

そして、もう一つの楽しみは絵葉書に貼られた切手である。K氏から頂いた絵葉書に貼られた（花の切手）だけで八通あった。ニッコウキスゲ、ミズバショウ、カタクリ、コスモス（長野県）、クロユリ（石川県）、ヤマモモ（高知県）、モモノハナ（岡山県）ミヤギノハギ（宮城）である。

花以外にも、十二単衣のお姫さま、深川八幡祭（東京）、エゾヒグマ（北海道）、お年玉切手など、見ているだけで楽しめるものばかり。

K氏からの絵葉書には本当に励まされた。病気であることを忘れさせるほどである。少し元気になったいま、絵葉書で心配してくれた友だちに礼状を書いている。有難いことである。